

# 福岡城下町遺跡2

—第4次調査報告—

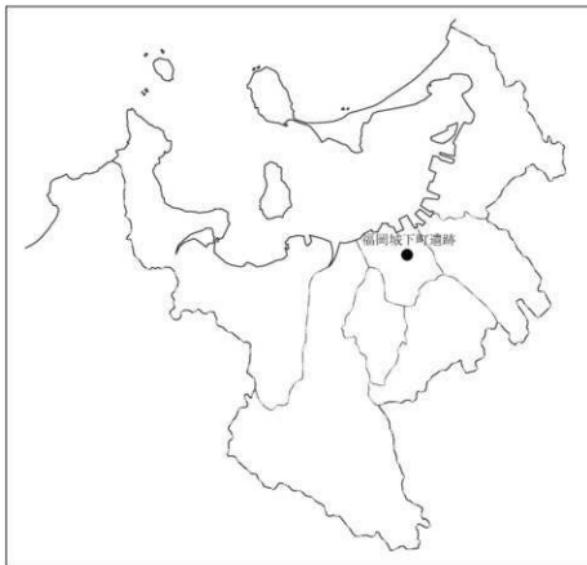
2021

福岡市教育委員会



# 福岡城下町遺跡2

—第4次調査報告—



遺跡略号 FUM4  
調査番号 1913

2021  
福岡市教育委員会



## 序

福岡市は、古来、大陸文化の門戸としての役割を担い発展してきた歴史をもち、地中には多くの文化財が分布しています。本市では、これら文化財の保護につとめているところではあります  
が、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財に対しては、発掘調査を行い、記録保存を行なうことで後世に残しています。

本書は、中央区赤坂1丁目に所在する福岡城下町遺跡の第4次調査の報告書です。本調査地点は江戸時代初期より福岡藩の上級家臣屋敷として利用され、後に郡役所が移設されます。今回の調査では主に郡役所の時期の遺構が多数検出されました。また、江戸時代初期における上級家臣屋敷ならではの遺物として瀬戸黒や黄瀬戸に並ぶ美濃の茶陶、織部焼が出土するなど一帯の土地利用の変遷を知ることができる大きな成果が得られました。

本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご理解とご協力をいただきました事業主をはじめとして関係者の皆様、心から感謝の意を表します。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 星子 明夫

## 例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が令和元年5月15日から6月14日まで中央区赤坂1丁目で実施した福岡城下町遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。なお、発掘調査及び整理報告書作成は費用の一部を国庫補助金事業として実施した。
2. 遺構は、井戸をSE、土坑をSKとそれぞれ記号化し01から通して番号を付した。柱穴はSPと記号化し、上記遺構とは別に01から通し番号を付した。
3. 本書で使用した方位は、すべて国土座標北（世界測地系）である。
4. 本書に掲載した遺構実測、遺構写真撮影は加藤良彦による。
5. 本書に掲載した遺物実測は久富美智子、棚町陽子、中尾祐太が行い、製図は中尾による。
6. 本書の執筆は中尾が行い、編集は田上勇一郎の補助を得て中尾が行つた。
7. 本書に係る記録と遺物は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理・活用する。

調査番号	1913	遺跡略号	FUM4
調査地	中央区赤坂1丁目 175-1、2、3	分布地図図幅名	60 舞鶴
申請面積	257.48m <sup>2</sup>	開発面積	200m <sup>2</sup>
調査実施面積	195.04m <sup>2</sup>	事前審査番号	30-2-1188
調査期間	2019.05.15～2019.06.14		

## 本文目次

Iはじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
II調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 遺構と遺物	6
(1) 井戸	6
(2) 土坑	7
(3) その他の出土遺物	19
III小結	21

## 挿図目次

Fig1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig2 調査地点位置図 (1/2,000)	3
Fig3 福岡城下町遺跡 1次調査・4次調査遺構配置図 (1/500)	4
Fig4 福岡城下町遺跡 4次調査遺構配置図 (1/100)	5
Fig5 SE002 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	6
Fig6 SK003 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	7
Fig7 SK005・009 実測図 (1/60)	9
Fig8 SK005 上層出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig9 SK009 上層出土遺物実測図 1 (1/3)	13
Fig10 SK009 上層出土遺物実測図 2 (1/3)	14
Fig11 SK005 下層客土出土遺物実測図 (1/3) (1/2)	15
Fig12 SK009 下層客土出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig13 SK005・009 下層客土出土遺物実測図 (1/3) (1/2)	17
Fig14 SK007 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	18
Fig15 SK008 実測図 (1/40) および 出土遺物実測図 (1/3)	19
Fig16 SK010, SK016・017 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	20
Fig17 その他の出土遺物実測図 (1/3)	21

## 写真目次

Ph1 SK009 碾検出状況 (北東から)	10
Ph2 SK005・009 下層客土内瓦片検出状況 (北東から)	10
Ph3 SK009 上層出土遺物 (40)	15
Ph4 調査区北半上部全景 (南西から)	22
Ph5 調査区北半下部全景 (南西から)	22
Ph6 調査区南半全景 (西から)	23
Ph7 SK005・009 下層土層断面 (西から)	23

## I はじめに

### 1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市中央区赤坂1丁目地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成31年3月8日付で受理した。

これを受け埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である福岡城下町遺跡に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下120cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成31年4月26日付で、個人を委託者、福岡市長を受託者とした埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年（令和元年）5月15日から発掘調査を、令和2年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

### 2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成31年度（令和元年度）・資料整理：令和2年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波 正人

調査庶務：文化財活用課

課長 松本 真人

同課管理調整係長 藤 克己（H31・R1年度）

大森 秋子（R2年度）

同係 松原加奈枝

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係

係長 本田浩二郎

同課主任文化財主事 田上勇一郎

同係文化財主事 朝岡 俊也（H31・R1年度）

山本 晃平（R2年度）

調査担当：埋蔵文化財課調査第1係

文化財主事 加藤 良彦（H31・R1年度）

整理担当：埋蔵文化財課事前審査係

主任文化財主事 田上勇一郎（R2年度）

同課調査第2係

文化財主事 中尾 祐太（R2年度）

### 3. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡城下町遺跡は、福岡城北側の博多湾沿岸部に所在する。遺跡の基盤層は箱崎砂層と呼称される新砂丘砂層である。本砂丘は博多湾岸にはほぼ沿う範囲に堆積しており、砂丘上には姪浜遺跡、藤崎遺跡、西新町遺跡、博多遺跡群、箱崎遺跡などが点在している。各遺跡では縄文時代以降の遺物が認められ、古墳時代以降になると、遺構が増加する。福岡城下町遺跡内では、本調査地点に東接する1次調査の最下面で検出した溝状遺構から中世の中国産陶磁器とともに古代の須恵器が出土しており、現時点での報告されたものではこれが最も古い。周辺をみると、福岡市役所地下駐車場建設に伴う福岡城肥前掘の調査では、弥生時代～古墳時代前期の遺物が出土しており、周辺に当該機の遺構が展開する可能性が示唆されている。福岡城下町遺跡内にも同時期の遺構が広がる可能性は十分にあるものと考えられる。

福岡城下町は福岡城築城とともに形成されたと考えられる。本調査地点を含む一帯をみると、当初は福岡藩家臣の屋敷として利用されており<sup>註1</sup>、絵図から「黒田二十四騎」の一人に数えられる黒田一成や、同じく黒田二十四騎の一人であった久野重勝の孫にあたる久野一重の屋敷地であったことが分かる。久野氏は18世紀前半までには当該地を離れ城内に屋敷を拝領し、久野氏が去った後は、中老の斎藤家が対象地に屋敷を拝領し、以後19世紀前半まで利用される。

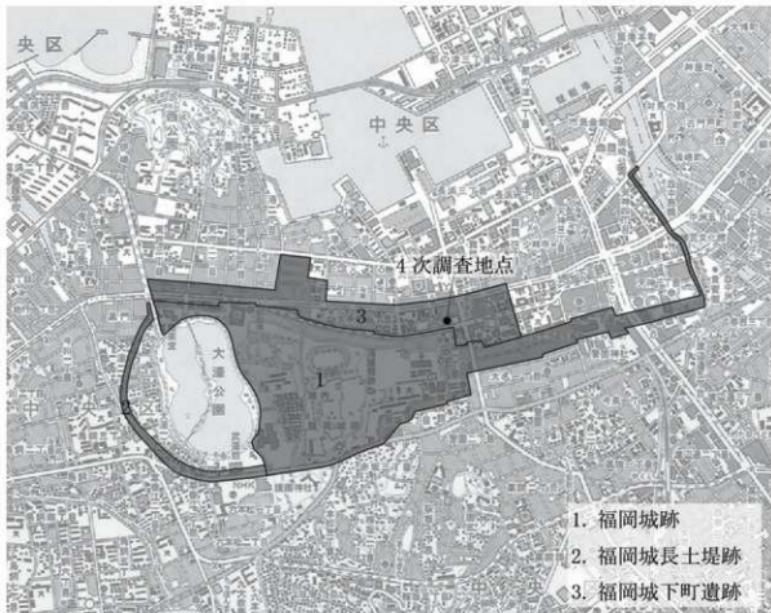


Fig1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

文化9年（1812）年、斎藤家屋敷は火災により焼け、文政元（1818）年に福岡城内にあった郡役所が斎藤家屋敷跡地に移設されることになる。1次調査では郡役所の時期に相当する第1面の調査で礎石建物が検出されているが、その礎石列と福岡藩奉行所配置図<sup>註2</sup>の建物の位置図のラインがほぼ一致することから、郡役所に伴う礎石とされている。

本調査地点は1次調査地点の西側に位置しており、検出した遺構や遺物の大半は郡役所移設時前後の時期を示す。当該期に位置づけられるSK005及び009は特筆すべきで、下層に多量の瓦礫を埋め、その上面に瓦片を敷き、これを褐色土によって被覆する。さらに壁面を礫によって護岸する特殊な構造をもつ。両土坑は最終的に海浜砂で埋められ、その景観は白洲状を呈していたと推定される。調査担当者は、時期的に符号することから、本遺構を屋敷の火事場処理およびその後の庭園造作によるものと判断している。

註1 対象地における土地利用については以下を参照した。

宮野弘樹 2017「2. いわゆる「福岡藩役所跡」の土地利用について」山崎龍雄編『福岡城下町遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1322集

註2 九州歴史資料館蔵 林（美）家文書



Fig2 調査地点位置図 (1/2,000)

## II 調査の記録

### 1. 調査の概要

本調査は敷地面積 257.48 m<sup>2</sup>のうち、共同住宅建設によって影響が及ぶ範囲で実施した。調査面積は 195.04 m<sup>2</sup>である。

調査に先立ち、事業主協力のもと、表土の掘削及び搬出を行い、令和元年 5月 15日より調査を開始した。調査は排土置きの関係上、南北で 2分割して、北側を 1区とし調査を行った。1区では井戸、土坑等を検出。順次遺構掘削、記録を行い、1区の調査は 6月 6日に終了。翌 7日に反転作業を行つた。2区とした南側は大部分が搅乱されており、島状に残る遺構を対象として行つた。掘削は 6月 12 日まで行い、平行して実測図作成。6月 13 日には 2区の全景撮影を行い、同日全ての実測作業も終了。翌 14 日に撤収作業を行い、調査にかかる全ての作業を終了した。

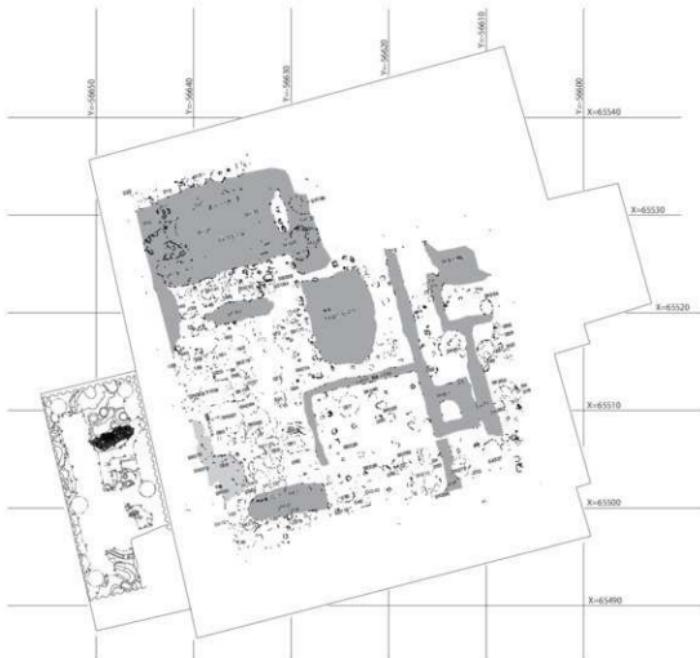


Fig3 福岡城下町遺跡 1次調査・4次調査遺構配置図 (1/500)

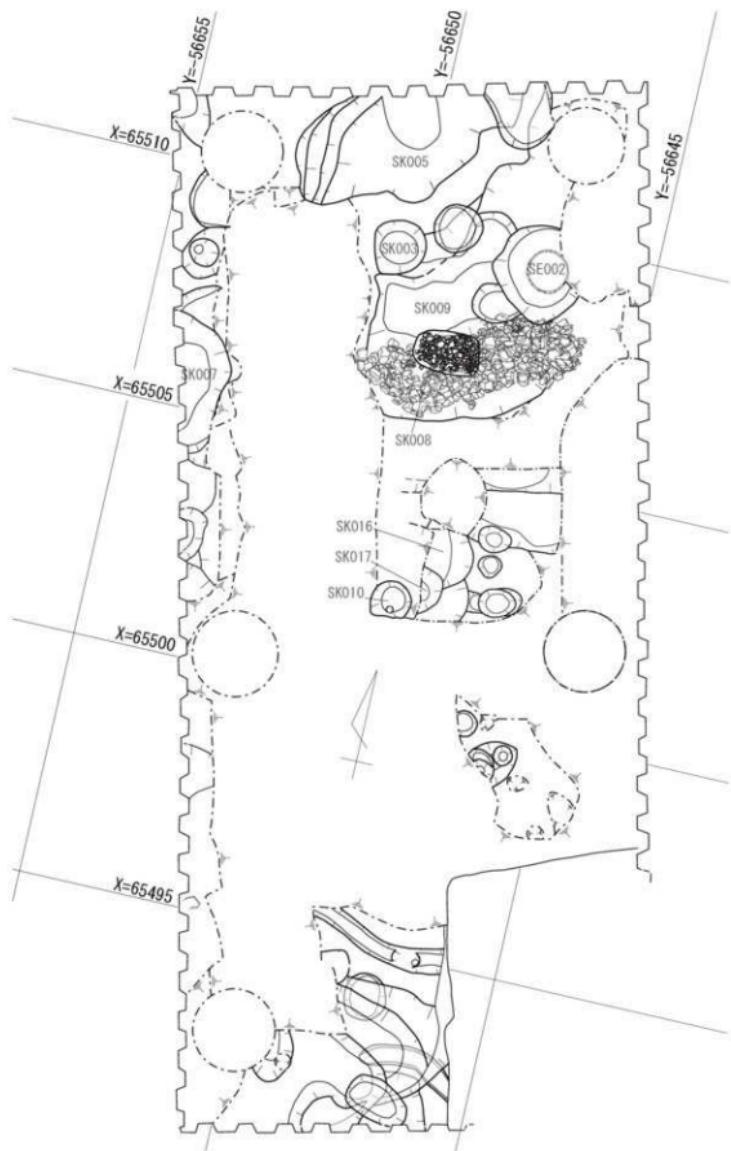


Fig4 福岡城下町遺跡 4次調査機器配置図 (1/100)

## 2. 遺構と遺物

### (1) 井戸

井戸は1基検出した。

#### SE002 (Fig5)

調査区北東部で検出した瓦組の井戸である。SK009を切る。堀方はややゆがんだ円形を呈する。深さ約80cmまで掘削したが、安全上以下の掘削は行っていない。瓦は井戸専用のもので、小口に小溝をもつ。井筒組み上げ時にこの部分、及び縫ぎ目に漆喰をかませる。以下に図示した遺物の他、井筒内にはブリキ缶が多量に投擲されており、19世紀前後から近代まで使用された井戸と考えられる。

1～5は堀方出土遺物である。1は肥前系磁器の蓋である。2は肥前系陶器の甕である。外面には一部にタタキ痕が残る。3は肥前系陶器の擂鉢である。口縁部はやや薄い玉縁状を呈し、口縁部直下に2本の沈線が残る。擂目は10本前後で1単位となるか。擂目上端は揃えられる。4は軒丸瓦である。右回りの三巴文を施し、頭は小さく尾は短い。残存部から推定して珠文は少ないものと思われる。5は軒平瓦である。三葉文を中心飾りとするもので、唐草文が派生する。6は井筒出土の軒平瓦である。中心飾左に配された唐草文様部分が残る。

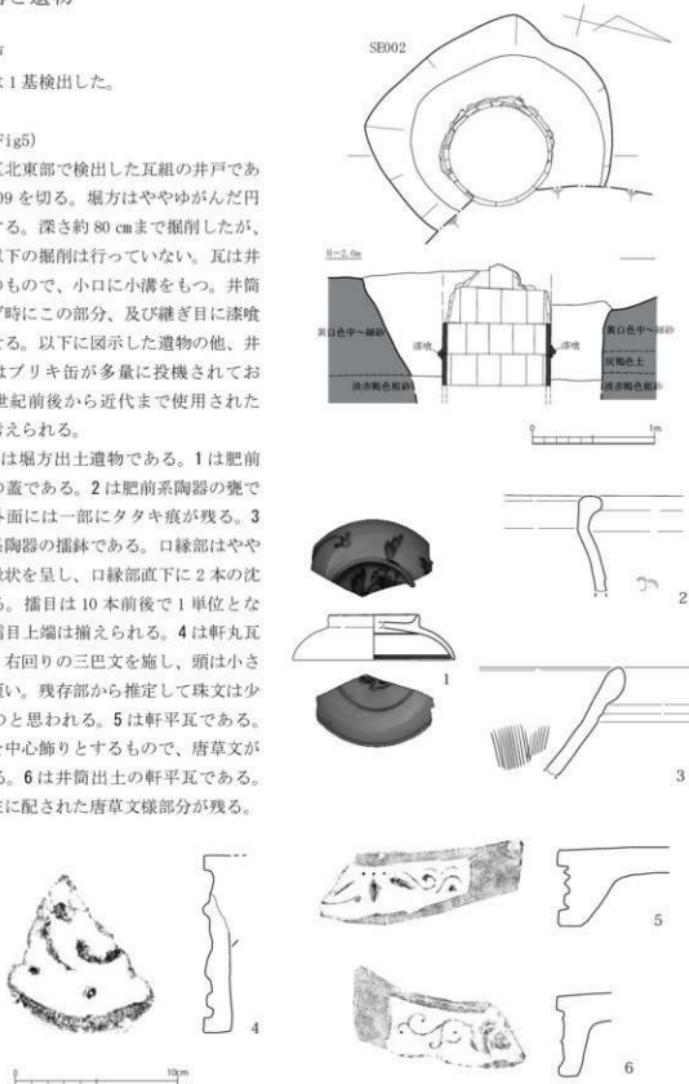


Fig5 SE002 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

(2) 土坑

本調査地点で最も多く検出した遺構は土坑である。大小様々あるが、SK005・009は瓦礫を埋めた後に上面を瓦で舗装した特殊な構造をもつ。

SK003 (Fig6)

調査区の北東部で検出した。平面不正円形で深さは 75 cm 残存する。床面は平坦で直線的に立ち上がる。SK005・009 の間の陸橋部上からの掘り込みであり、これらの遺構との関係から 19 世紀以降のものと考えられる。

7～9は肥前系染付磁器である。7は碗。底部は比較的小さく、腰は張らず、外側に開きながら立ち上がる。8は皿。体部は高台際から直線的に立ち上がる。9は蓋である。10は肥前系の青磁で、脚付の香炉である。脚は三方につくものと考えられる。体部は明緑灰色の釉がかかり、底部を露胎とする。11は肥前系陶器の大甕である。肩部に2条、胴部に4条の沈線をもち、その間に波状文を施す。いわゆるハンズーガメである。

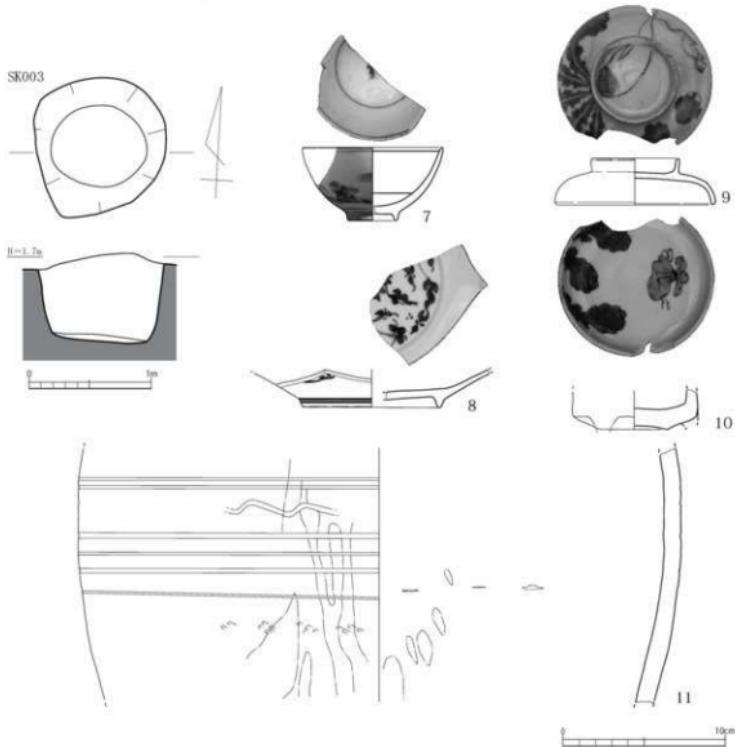


Fig6 SK003 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

#### SK005・009 (Fig7 ~ 13・Ph1 ~ 4・7)

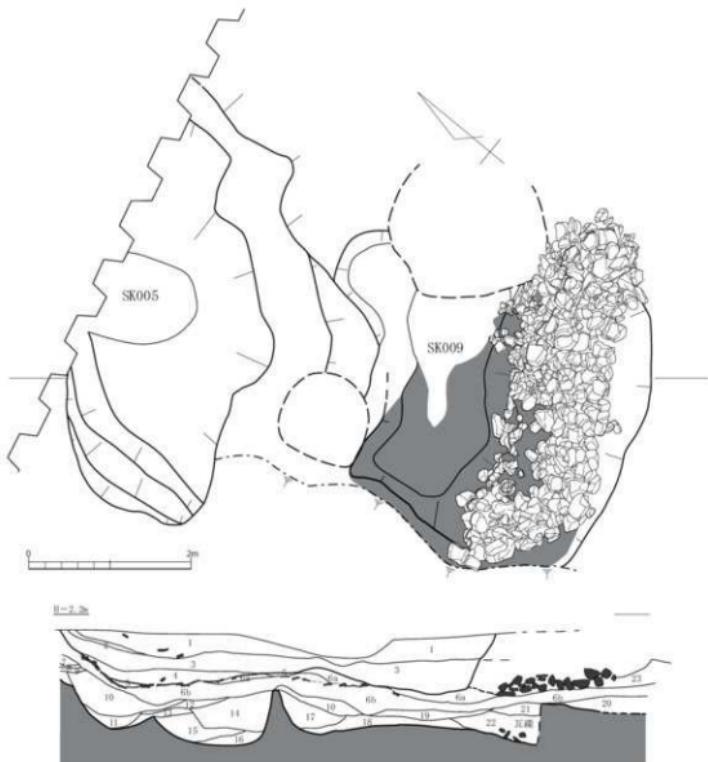
調査区北東部で検出した隣り合う平面不正形の土坑である。異なる遺構番号を付しているが、遺構の時期や埋没の過程等に共通性が認められるため、同一の遺構と考えられる。それぞれ遺構の一部をSE002、SK003に切られる。

本遺構の埋没過程は大きく二時期に分かれる。埋没第一期の覆土はFig7の土層5~13に該当するもので、下層を中心として、瓦礫や焼土、炭粒を含む層が客土されており、上層には瓦を敷き詰め、そのさらに上面を灰褐色～暗灰褐色土で被覆する。SK009の南壁は壁面が礎によって丁寧に護岸されている。埋没の第二期は土層の1~4に該当し、海浜砂を基本とする黄灰色砂で埋め戻している。本遺構出土遺物は上記のとおり上下各層で分けて取り上げているが、上層下層ともに19世紀前半代のものを中心としており、それぞれの埋没時期に大きな差はない。

対象地は江戸時代初期より上級家臣の屋敷であった。三奈木黒田家、久野家の屋敷地として利用された後、18世紀前半後に斎藤家が対象地に屋敷を拠領し、以後19世紀前半まで利用される。転機が訪れるのは文化9(1812)年で、この年、火災により斎藤家屋敷は焼失することになり、その後文政元(1818)年に福岡城内にあった郡役所が斎藤家屋敷跡地に移設されることになる。上述したとおりSK005・009の下層の覆土中には瓦礫や焼土、炭粒が混入しており、これと時期的な符合を勘案すると、第一期の覆土は斎藤家屋敷の火事場処理に直接の起源をもつ可能性が考えられる。礎による護岸は機能的、景観的側面から様々なことが考えられるが、現状では不明と言わざるを得ない。上層の海浜砂による埋め戻しについても、背景、性格ともに不明である。郡役所の配置図をみると本調査地點は「御郡溜蔵」となっているが、両者ともに蔵に伴うものとは考え難い。調査時における検出時点の景観は白洲状を呈しており、この点を重視すると、郡役所の庭園の一部を構成するものか。詳細については周辺の調査成果や類例の増加を踏まえ判断したい。

12~28はSK005上層海浜砂中出土遺物である。12~22は肥前系の磁器である。12~15は染付碗である。12・13は腰が丸みを帯びる筒形碗。13は高台を蛇目状に幅広く削り出し、疊付部分は無釉とする。14は腰が張った丸碗で見込みには昆虫文を有する。15はいわゆる広東碗である。16・17は小碗。16は色絵、17は白磁である。18・19は染付の輪花皿である。20は染付の段重である。蓋を伴うものだろう。21・22は染付蓋付碗の蓋である。23は国産陶器の香炉である。内面は無釉。外面には浅黄色の光沢が少ない釉がかかる。口縁部付近には銅緑釉がかかり、胴部には焦げもみられ、美濃窯のいわゆる黄瀬戸に代表されるタンバン様を呈する。24は福岡高取系の陶器。胴部が僅んだ竹節形の瓶である。25は土師器小皿である。器高1.0~1.1cm、口径7.2cm、底径5.3cmを測り、底部の切り離しは糸切りによる。26・27は陶器の皿である。26の口縁部には油煙が残り、灯明皿として使用されている。27も灯明皿か。28は軒丸瓦片である。瓦当の下部が残存しており、上部は図上で復元した。

29~58はSK009上層海浜砂中出土遺物である。29~39は肥前系磁器である。29-30は染付碗である。29は腰が張った丸碗で見込みにはコンニャク印判による五弁花文を施す。30は広東碗である。31は白磁碗である。外底面には花押の墨書を施す。32は白磁の小碗である。外底面には「小」字の墨書を施す。33は色絵の小碗で、底裏銘は染付による。34・35は染付皿である。34は蛇目回形高台をもつ輪花皿。36はそば猪口である。蛇目回形高台をもち、口縁内部には四方攢文を巡らせる。37は貝を模った白磁の紅皿である。38は染付の仏飯器である。幅広の蛇目高台を有し、疊付を釉剥ぎする。39は青磁の香炉である。40は器種不明陶器の底部片。外側に開く高台をもち、体部はやや窄まりながら立ち上がる。見込みは饅頭心状に盛り上がる。外底面には墨書が残り、判読可能な部分に「文化



1. 黄灰色粗砂（φ1cm前後の炭粒、瓦片を少量含む）  
 2. 黄灰色混土砂礫（黒灰色粘質土のブロックを1/2～2/3程度含む）  
 3. 黑灰色中-粗砂（炭粒をわずかに含む）  
 4. 黑灰色細砂（炭粒・黒灰色粘質土小ブロックを少量含む）  
 5. 黄褐色砂質土  
 6a. 硫灰褐色砂質土（明赤褐色土ブロックを3/4程度含む）  
 6b. 硫灰褐色土  
 7. 硫灰褐色砂質土（明赤褐色土ブロックを3/4程度含む）  
 8. 硫灰褐色土  
 9. 硫灰褐色砂質土（明赤褐色土ブロックを3/4程度含む）  
 10. 硫赤褐色砂質土・硫灰褐色砂質土による10～15cm幅の互層  
 11. 硫灰色粘質土（炭粒を多量含む）  
 12. 黄白色中砂  
 13. 硫灰褐色土  
 14. 硫灰褐色土、硫灰色土。黄白色砂による2～5cm幅の互層  
 15. 明赤褐色土・ルートブロック  
 16. 硫灰色混砂粘質土  
 17. 黄褐色細砂  
 18. 灰褐色混土砂（赤色小ブロック、炭粒を多く含む）  
 19. 接触色中砂  
 20. 黑灰色粘質土（炭粒多量に含む）  
 21. 硫灰褐色土、硫赤褐色土による5～10cmの互層  
 22. 灰褐色砂質土（礫、瓦を少量含む）  
 23. 灰褐色砂質土（地土粒、墨粒を多く含む）

※1 平面図のアミは瓦の分布範囲を示す。

※2 土層番号は基本的に調査時のまま報告している。

Fig7 SK005・009 実測図 (1/60)



Ph1 SK009 瓦片検出状況（北東から）



Ph2 SK005・009 下層客土内瓦片検出状況（北東から）

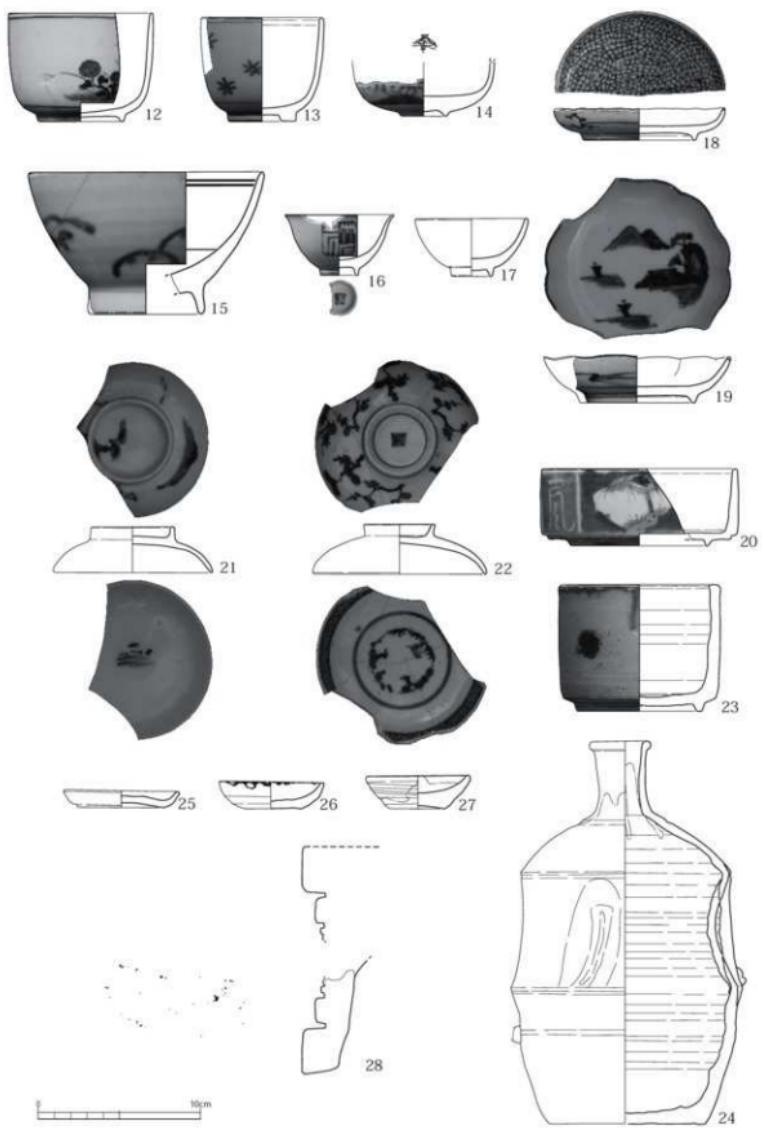


Fig8 SK005 上層出土遺物実測図 (1/3)

十二（年）四月」とある。つまり、この墨書は本調査地点が火災にあった文化9（1812）年と郡役所が移設された文政元（1818）年の間に施されたものである。**41・42**は陶器の土瓶とそれに伴う蓋である。胎土はにぶい赤褐色、釉はオリーブ褐色を呈する。土瓶の体部には煤が付着する。**43・44**は陶器の蓋である。**45**は陶器の花瓶。福岡県上野焼か。**46**は陶器の注口付の擂鉢である。**47**は陶器の小皿。外面口縁部付近に油煙に付着しており、灯明皿として使用されている。**48・49**は土師器小皿である。**48**は器高1.2cm、口径7.2cm、底径5.5cmを測る。底部の切り離しは糸切りによる。内面には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたことが分かる。**49**は器高1.05cm、口径7cm、底径2.4cmを測り、底部の切り離しは糸切りによる。**50**は土師質土器の脚部である。**51**は瓦質土器の火鉢もしくは火舎か。外面には丁寧なミガキが施され、馬を模したスタンプが押される。**52**は土師質の十能である。煤が付着する。**53～55**は瓦である。**53**は軒丸瓦。尾が長い右回りの三巴文と珠文を施す。**54・55**は軒平瓦である。**54**は中心飾りに下向きの三葉文を、その周囲に唐草文を施す。**55**には梅花文を中心飾りとするものである。**56**は硯である。いわゆる赤間硯で、色調は赤みを帯びており、背面には「（赤）間闇」の線刻が施されている。**57**はSK009とSK005出土遺物として一括で取り上げた際に出土した肥前系陶器の擂鉢である。**58**は肥前系磁器の染付碗である。SK009下層遺物として取り上げた破片と接合する。腰が張った丸碗で、口縁には四方擗文を施す。

**59～68**はSK005下層の客土出土遺物である。**59**は肥前系の染付碗。見込みに昆虫文を施す。**60**は鉄釉碗である。外面及び内面の口縁部付近に光沢が少ない釉がかかる。高台を切り込んだいわゆる切高台で、一部に砂目が残る。肥前系磁器か。**61**は肥前系の京焼風陶器の碗である。浅黄色の精製された胎土をもつ。高台は鋭く削られ、外底部には「清水」銘が線刻されている。**62**は盤状を呈する陶器である。体部には穿孔を施す。**63**は肥前系陶器二彩の鉢である。武雄産か。**64**は土師質の風炉である。外底面には墨書が残る。**65・66**は土師器小皿である。**65**は器高1.05～1.45cm、口径6.1～6.4cm、底径4～4.3cmを測る。底部の切り離しは糸切りによる。**66**は器高1.55cm、口径9.4cm、底径7.8cmを測る。底部の切り離しは糸切りによる。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されていることが分かる。**67**は混入資料の統制陶器片である。「肥28」の統制番号が残る。本統制番号が付与されたのは佐賀県塙田町の志田陶磁器株式会社である。**68**は青銅製品である。座金か。

**69～81**はSK009下層の客土出土遺物である。**69～71**は白磁の紅皿である。いずれも貝殻を模したものである。**72**は白磁の超小型碗。ミニチュアの玩具だろう。**73**は現川焼の碗である。内外面ともに巻刷毛目を施す。**74**は肥前の陶器碗である。外面には鉄絵による若松文を描く。**75**は肥前の京焼風陶器碗である。**76**は肥前系陶器の輪花皿である。内外面に銅緑釉をかけ、口縁部付近は灰オリーブ色に、体部は暗青灰色に発色する。内野山窯系の製品か。**77**は焼き締め陶器の蓋か。上部にはスタンプによる文字が表現されているが、判読不能。**78**は肥前系陶器のいわゆるハンズーガメの口縁～体部上半片である。**79～81**は瓦である。**79**は軒丸瓦である。瓦当文様は右回りの三巴文で、頭は大きく、尾はやや短い。**80**は軒平瓦である。中心飾りは菊花文で、周囲に唐草文を配する。**81**は家紋鬼瓦である。瓦当文様となる家紋は斎藤家のものである花菱が施される。背面には紐等を括りつけるためのものと考えられる取っ手がつくが、この部分の成形は難である。

**82～89**はSK005・009の下層客土出土として一括で取り上げた遺物である。**82～84**は肥前系染付碗である。**82**はやや腰が張る丸碗で、口縁には四方擗文を巡らし、見込みには五弁花を描く。**83・84**は広東碗である。**85**は肥前武雄産陶器の火入である。白化粧を刷毛塗りした後に緑彩を施す。高台の一部をやや幅広に削り取って切高台とする。**86・87**はいずれも三巴文の軒丸瓦である。**88**はガラス製の笄でカットグラスである。**89**は青銅製煙管の吸い口である。

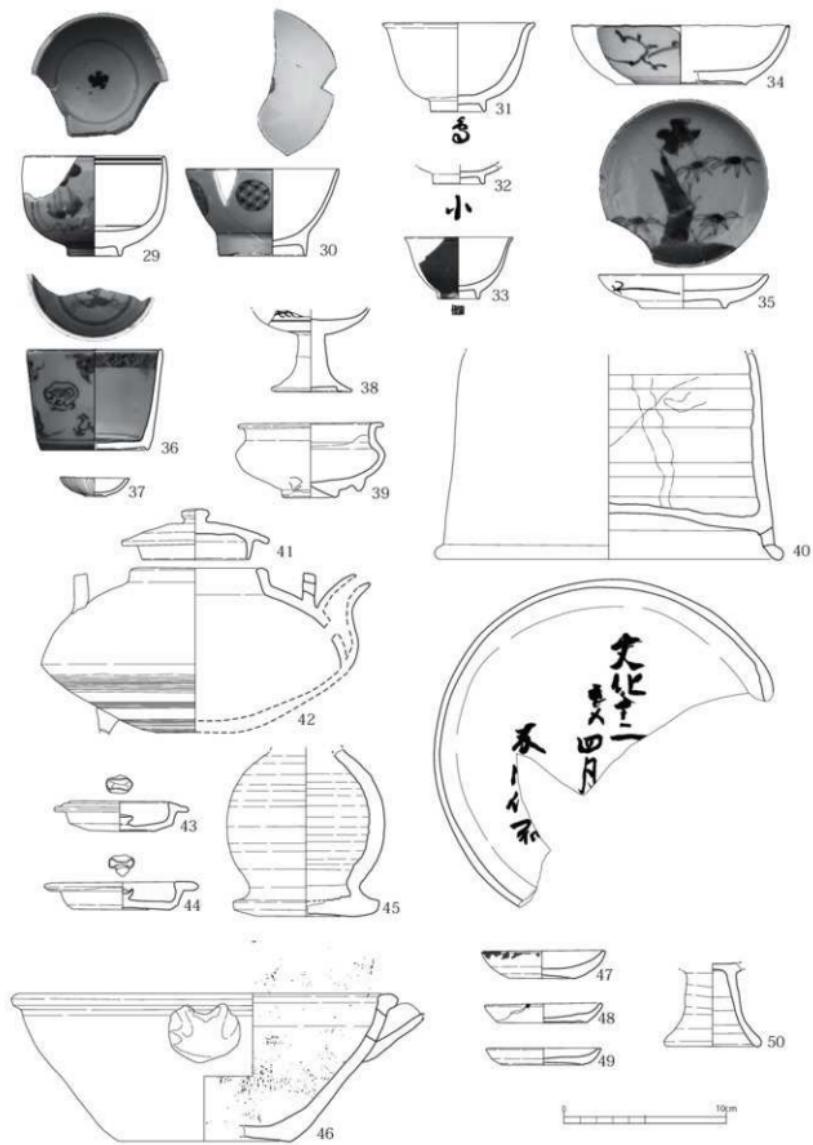


Fig9 SK009 上層出土遺物実測図 1 (1/3)



Fig10 SK009 上層出土遺物実測図 2 (1/3)

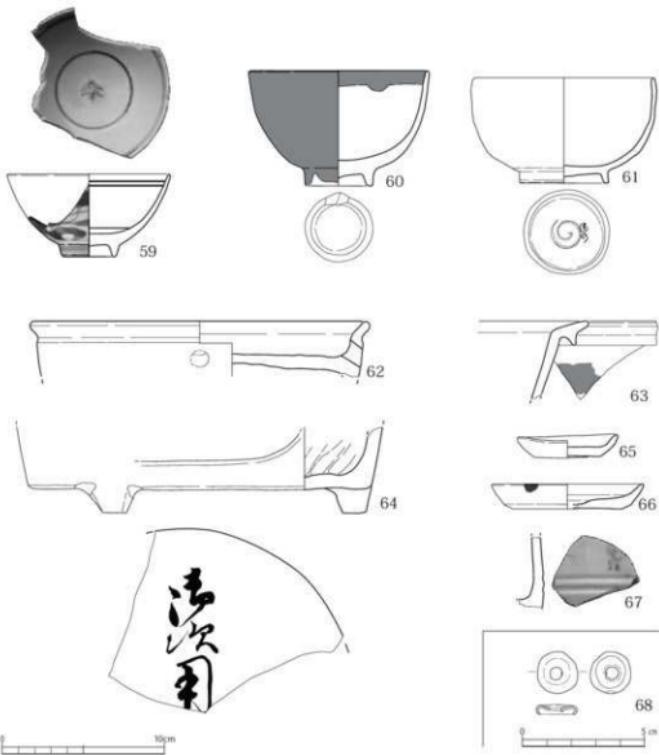


Fig11 SK005 下層客土出土遺物実測図 (1/3) (1/2)



Ph3 SK009 上層出土遺物 (40)

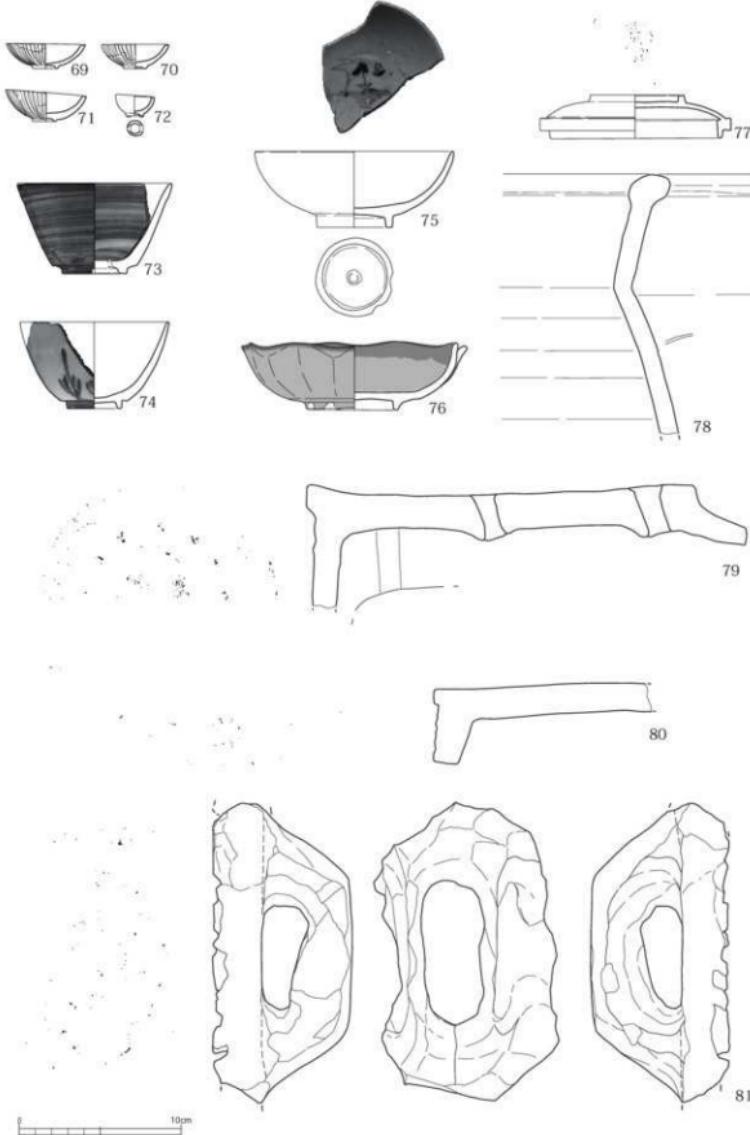


Fig12 SK009 下層客土出土遺物実測図 (1/3)

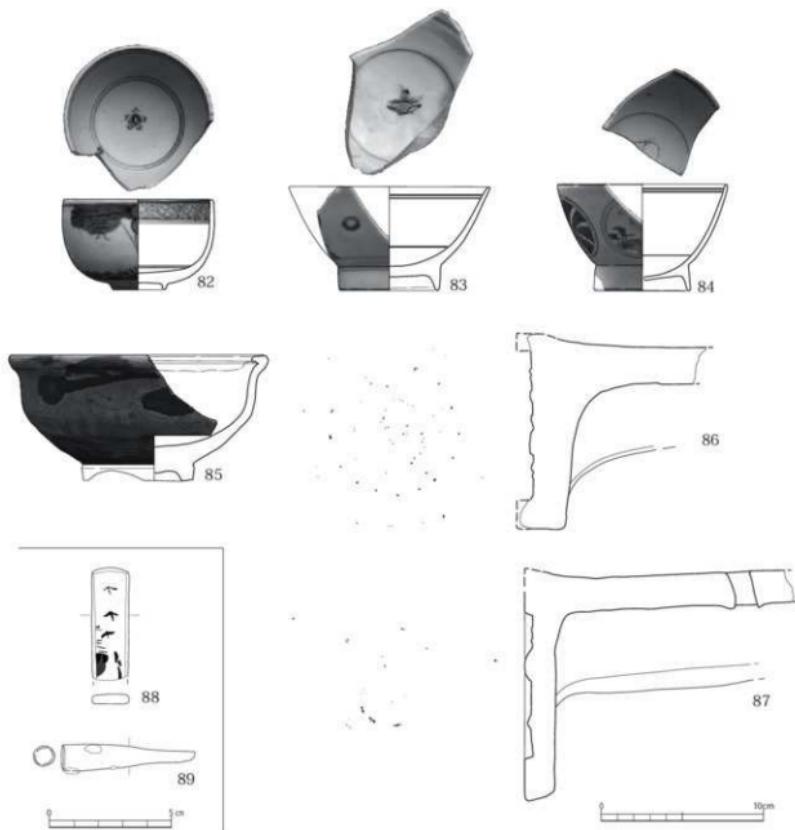


Fig13 SK005・009 下層客土出土遺物実測図 (1/3) (1/2)

#### SK007 (Fig14)

調査区西端部で検出した。西側は調査区外にのびるが、残存部から推定して、平面形は円形を呈するか。深さは約 50 cm 残存しており、碗形に緩やかに立ち上がる。

90・91 は肥前系染付磁器である。90 は蛇目回形高台を有する皿である。91 は色絵の磁器小片である。92 は肥前系陶器の插鉢である。93・94 は陶器の蓋と壺である。胎土や施釉法に共通性がみられるため、セットになるものと考えられる。釉の上に白化粧を施し、さらに鉄絵によって木および花を描く。蓋の鉄絵部分は焦げつきが認められる。95 は土師質の焜炉である。96 も土師質土器である。植木鉢か、外面ナデ仕上げで、内面は口縁付近はナデ、体部はハケ調整によって仕上げる。

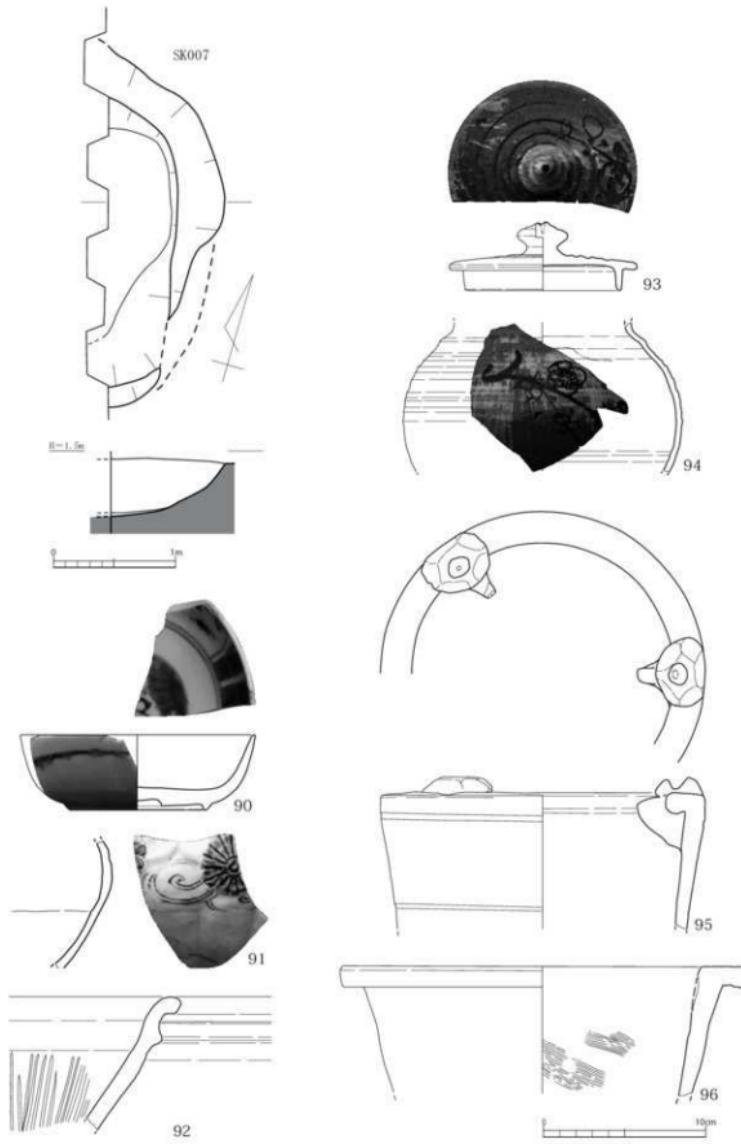


Fig14 SK007 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

### SK008 (Fig15)

調査区北東部、SK009 上面で検出した。平面は丸みが強い隅丸方形を呈し、短軸は 90 cm、長軸は 130 cm を測る。検出面から底面までの深さは約 30 cm あり、覆土内には礫が充填されている。

出土遺物として図化したものはやや時期が古いものもあるが、SK009 との関係から 19 世紀以降の遺構であると考えられる。

97・98 は肥前系染付の碗である。99 は肥前京焼風陶器の皿である。高台は鋭く削り出され、外底面の中央には円刻を施す。見込み部分には山水文を描く。

### SK010 (Fig16)

調査区中央部で検出した。径 70 cm～90 cm の不正円形で、深さは 30 cm 残存。底面は平坦で、緩やかに立ち上がる。

100～102 は肥前系染付磁器である。100 は広東碗である。101 は色絵の小碗である。102 も色絵の磁器である。円筒形を呈し、外面及び内面の口縁部付近には施釉するが、内面の下半は露胎とする。香炉か。103 は陶器の鉢である。

### SK016・017 (Fig16)

調査区中央部で検出した。隣接しており、SK017 が SK016 を切る。また、いずれも西半を攪乱によって切られる。両者ともに円形もしくは不正円形を呈するものと考えられ、検出レベルが低い SK017 は深さ 30 cm 程度しか残存していないが、SK016 は約 70 cm 残存する。

104 は肥前系染付磁器の香炉か。中央が僅んだ筒形を呈し、内面は口縁付近を除き露胎とする。105～108 は肥前系陶器である。105 は皿である。全面に施釉され、見込みには目跡が残る。106・107 は碗である。いずれも浅黄色の胎土に透明度が高い釉をかけ、高い高台を有する。106 は典型的な撥高台である。108 は火入である。109 は陶器鉢である。福岡県産か。110 は肥前系陶器の鉢である。白土を塗り、口縁付近には緑釉がかけられる。武雄産もしくは周辺のものだろう。

#### (3) その他の出土遺物 (Fig17)

ここではその他の遺構および攪乱から出土した遺物をまとめて報告する。111～115 はその他の遺構出土遺物である。111 は肥前系磁器の色絵碗である。112・113 は肥前系陶器である。112 は溝縁皿である。高台は土見せとし、高台内には兜形が残る。見込みおよび高台に砂目が残る。113 は火入で

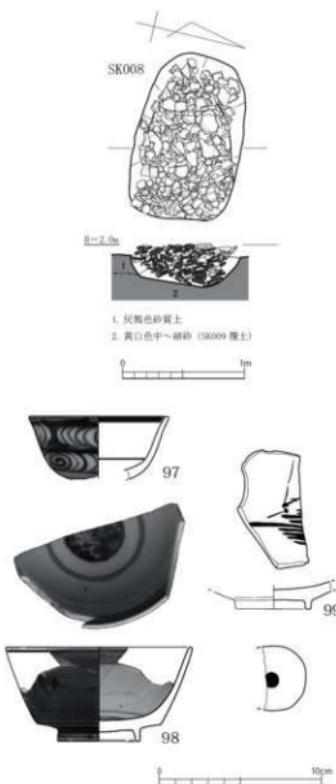


Fig15 SK008 実測図 (1/40) および

出土遺物実測図 (1/3)

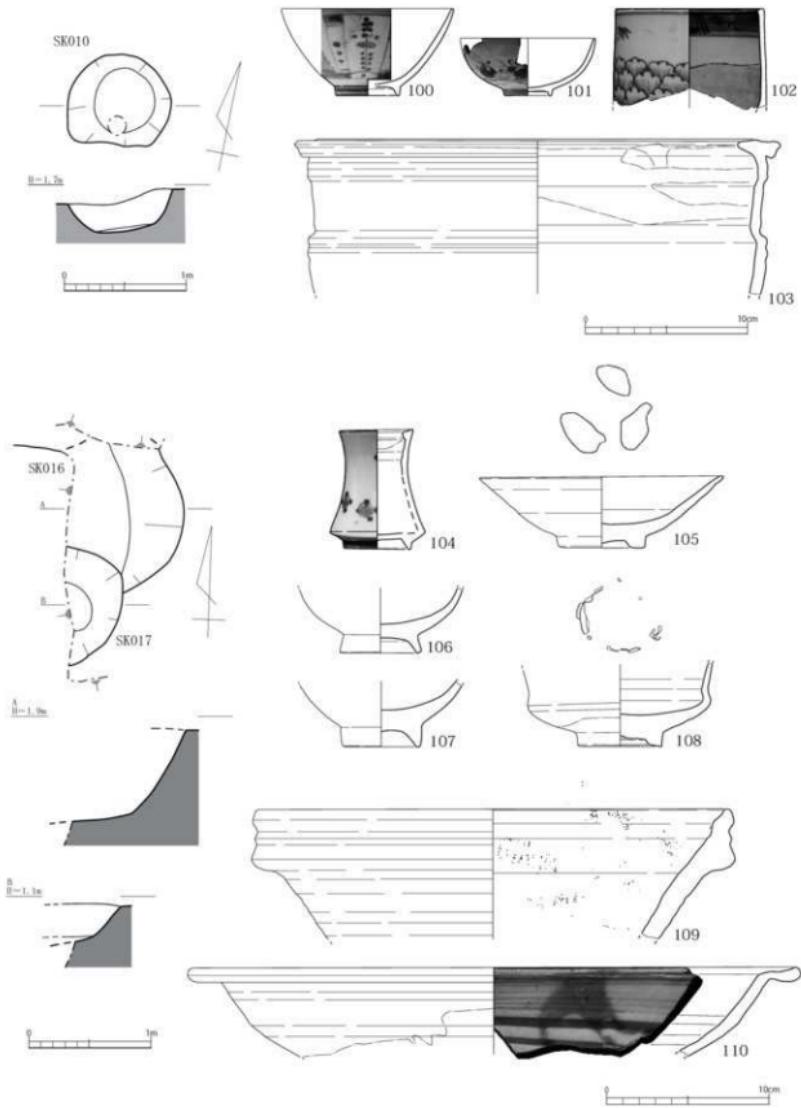


Fig16 SK010、SK016・017 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

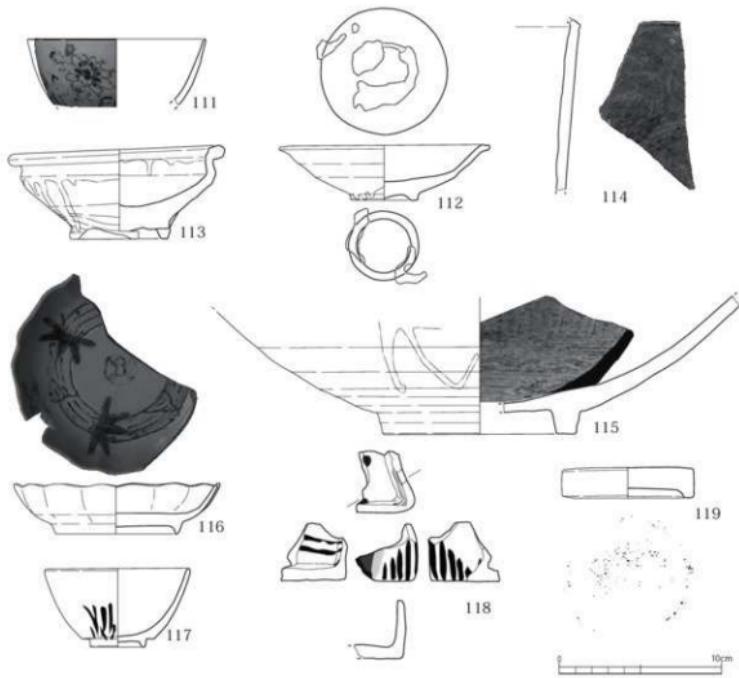


Fig17 その他の出土遺物実測図 (1/3)

ある。114は陶器片である。外面には陽刻によって猪とみられる鳥を表す。115は肥前系陶器の鉢である。内面には白土による刷毛目装飾が施される。116～119は搅乱出土遺物である。116は肥前系磁器の輪花皿である。見込みを蛇目釉剥ぎしたもので、露胎部を中心に色絵による装飾を施す。117は肥前系陶器の碗である。外面に鉄絵による若松文が描かれる。118は織部焼の向付である。119は焼塩壺の蓋である。内面に布目が残る。

### III 小結

本調査地点では、主に一帯が郡役所として機能した時期前後の遺構を検出した。特にSK005・009は特筆すべきで、瓦礫を含む下層の覆土は、文化9(1812)年に起きた火災の火事場処理として埋められた蓋然性が高く、SK009下層から斎藤家の家紋鬼瓦が出土していることも示唆的である。上面の護岸および砂による埋め戻しについては、周辺の今後の調査の進展をまち判断したい。また、1次調査でも複数点確認されている織部焼の出土は、初期の上級家臣屋敷としての場の利用を顕著に示しているといえよう。



Ph4 調査区北半上部全景（南西から）



Ph5 調査区北半下部全景（南西から）



Ph6 調査区南半全景（西から）



Ph7 SK005・009 下層土層断面（西から）

## 報告書抄録

ふりがな	ふくおかじょうかまちいせき 2						
書名	福岡城下町遺跡 2						
副書名	第4次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1432集						
編著者名	中尾祐太						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 Tel 092-711-4667						
発行年月日	2021年3月25日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村					
福岡城下町遺跡第4次 1、2、3	福岡市中央区赤坂1丁目175-	40133	2888	33度 35分 21秒	130度 23度 23秒	2019.05.15 ~ 2019.06.14	195.04m <sup>2</sup> 事務所
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
福岡城下町遺跡	集落跡	江戸	井戸、土坑	陶磁器、瓦質土器、 土師質土器、瓦			
要約	<p>対象地は福岡城の北西に位置する。一帯は江戸時代初期より上級家臣屋敷地として利用され、屋敷が火災によって焼失した後、郡役所が移設される。本調査では郡役所の時期である19世紀前半での遺構、遺物を多く検出しており、うち一連の遺構と考えられる2基の土坑SK005・009は火事場処理に伴う可能性があり、さらにはその上面を瓦で覆い、壁面を礫によって護岸する特殊なものである。最終的に海浜砂で埋め戻されている。</p> <p>また、江戸時代の家臣屋敷を特徴付ける遺物として、織部焼の向付が出土している。</p>						

## 福岡城下町遺跡 2

### 第4次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1432集

2021（令和3）年3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社バナックスメディア

福岡市南区玉川町18番6号



